はじめに

「高鍋むかしばなし」として、昭和六十一年に第一集を、昭和六十三年に第二集を発刊し、高鍋地方に伝わる「むかしばなし」として、数多くの方々から読んでいただきました。

また学校でも、有意義なご活用をいただきましてありがたいことと感謝申し上げます。

現在の児童生徒のみなさんが、テレビ等によって得る知識の豊富なことには目をみはるものがありますが、実際に住んでいる郷土の伝承文化にじかに接することも大切なこととと存じます。

この点を考慮され、高鍋町に伝わる「むかしばなし」の収集に意欲的に取り組んで来られた高鍋町高齢者ボランティアグループ「ふるさとを伝える会」のご努力には敬意を表します。

おかげさまで第一・第二集に引き続き、高鍋に伝わってきた自然・生活の様子などが第三集として発刊されることとなり喜びに堪えません。

町内に眠っている「むかしばなし」の発掘にはいろいろなご苦労があったとお察しいたします。高齢者を訪問しての聴取・古い文書等の現代文への書き直し等、地味なお仕事の連続によってこの第三集が出来上がったわけでしてここに厚くお礼申し上げます。

どうぞたくさんの方々にこの「むかしばなし」を読んでいただいて、郷土たかなべを知り親しみを一層深くしてくださいますようお願いします。

平成三年三月三十一日

高鍋町教育委員会

教育長　岩　永　高　徳

目次

はじめに

第一部　民話の部

○日本の仁王どんと唐王どんの力くらべ……1
○コデク・コデク……3
○ブスくた……5
○ここにもちんじょきじょきはいた……8
○だご坂んたぬき……9
○ソバ畑の川渡り……11
○和助地蔵……12

第二部　伝説・昔ばなしの部

○お殿様とひょうすんぼう……14
○おさがりの箸……19
○外国嫌いの金比羅さん……20
○百済伝説の青木坂……22
○雪隠免許……23
○弥左どんの鈴虫と椋の木……25
○万蔵さんの知恵……26
○しょぜぐすり……28
○モンジさんの神通力……29
○ギャフンと参った……31

第三部　由来・思い出の部

○鶯巣の池……32
○琴弾きの松……35

第四部　思い出の邨

○小丸の二重垣……38
○弁財天と龍神の恵み……39
○狐の嫁入り……42
○鳴野橋……43
○片桐製糸工場……45
○弾とまむしとひょうすんぼ……47
○火の玉あれこれ……49
○火の玉二題……52
○新山の「ほせき焼き」……55
○十五夜まつり……57
○頼母子講……58
○市の山分校……60
○村まつり……62
○子供のころ……63

編集後記

ふるさとを伝える会会員

たかなべ むかしばなし 第三集

— 民話・伝説・物語・由来 —

ふるさとを伝える会
高鍋町教育委員会

―表紙写真―

琴弾きの松

画＝川　越　　強　氏
蔵＝都　原　トミ子　氏

高鍋町蚊口浦上地区の田圃に町の史跡「琴弾きの松」がある。昔は、写真のように、幹は太く、枝は曲がりくねり、遠くからでもよく見え、その偉容を誇っていたといわれている。また、この松は、海辺の風を受けては、よい音色を奏でて近隣の人に「琴弾きの松」と親しまれてきた。

日向守に任ぜられて高鍋に寄った源重之はこの松を見て、

白波のよりくる糸ををにすげて風にしらぶる琴弾きの松

と、詠んだと伝えられ、この和歌は今もなお史跡の石碑に刻まれている。

この松は、明治二十三年の大暴風雨に枝を折られ遂に枯死してしまった。

現在は、この跡に蚊口地区の皆さんのお骨折で松が植えられ整備されている。

第一部　民話の部

日本の仁王どんと唐ん唐王どんの力くらべ

家床　永友　千秋

昔々、日本の国にとっても力の強い人がいました。名まえは仁王どんといって誰と力くらべしてもけんかしても負けたことがありませんでした。そこで仁王どんは、桃太郎が鬼が島に鬼たいじに行ったように、どこかよその国に力くらべに行きたいものだと思い、お父さんやお母さんにそうだんしました。「それもよかろう、住吉の神様にそうだんしてごらん」と言われました。

仁王どんが住吉の神様のところに行って、そのことを話すと、神様は「うん、それもよかろう。隣の国に唐王どんという強い人がいるらしい。どっちが強いかやってみるのもよかろう。しかしどんなことがあるかわからんので、お守り袋をあげよう。もうどうしても自分の命があぶないと思う時にだけこの袋をあけて使いなさい」といってお守り袋をくださいました。

仁王どんは大喜びで舟にのり、ろをこいで出かけました。「唐ん唐王どんがなんぼ強してん負けるもんか」と言いながら、力一ぱいろをこいで、遠い唐の国にやって来ました。唐王どんの家に行ってみると、唐王どんのお母さんがおられました。

「わたしは日本の国からやって来た仁王というものです。日本で一番強いので、ここの唐王どんとどちらが強いか力くらべにやって来ました」と言うと、唐王のお母さんは、「それはようこそおいでなされた。唐王は今、後の山にたき木取りに行っています。もうすぐ帰って来ますから待っていてください」と言われました。

しばらくすると後の山の方で「ドシンドシン、ザアザアッ」と音がしはじめました。「おばさん、あの音は何の音ですか」とたずねると、おばさんは「あれは唐王が山の木を根こぎにして引張って来る音ですよ」と言われました。仁王どんは唐王どんはこんな足音を立てるほどだから、よっぽど大きな体の人にちがいない。山の木を

根こぎにするほどだからよっぽど力も強いに違いない。これはとてもかなわない。今のうちに帰らないと、ふみつぶされるかもしれない。たたきころされるかもしれないと思って海べの舟の所まで逃げていきました。

唐王どんは家に帰って来てこの話を聞き、「よーし仁王をやっつけてやるぞ」と言いながら、海べに追っかけて来ました。仁王どんは舟に乗るが早いか、全力でろをこぎはじめました。舟はどんどん沖の方に進みます。

「おーい仁王どん力くらべをやろう。逃げて帰るのはおかしいぞ」とよびかえします。見ると恐ろしく大きな大男が雷のような声でどなりながら、持って来た長い鉄のくさりのついたかぎを舟にめがけて投げました。「ブーン」と音を立てて飛んできた鉄のかぎは、舟にひっかかってはなれません。唐王は力まかせに「エイヤ、エイヤ」と舟を引きもどします。仁王どんがなんぼ力まかせにろをこいでも、舟はぐんぐん浜べに引きよせられます。この大力の大男に取っつかまったら大変です。

もうだめだ、どうしようと思った時、仁王どんはふと腰にさげているお守り袋のことに気がつき、急いで開いて見ると一本の鉄の棒でした。仁王どんは大急ぎで唐王どんのくさりのかぎをこすりました。ちょうど八へんこすった時、唐王どんのくさりがぷつーんと切れ、仁王どんはやっと助かって日本に帰ることができました。

帰ってこの事を住吉の神様に報告してお礼を言いましたら、「よかったよかった、あれは八すりと言うもんじゃ。これからは力じまんなんかしていないで、みんなのために、その大力を役立てない」とおっしゃいました。仁王どんはその大力で日本の国を守ることになりました。

コデク・コデク

（小大工＝ひとりまえでない大工のこと）

蓑江　田村　克豊

昔、むかし高鍋の中鶴に大変腕のよい甚兵衛という大工さんがいました。腕のよいことをいいことにしていばるので、仲間ではいやがる者もいたのです。

ある年のはじめ頃のことです。去年から手掛けていた町の人の家が立派に出来上がり、新築祝いがあった日のことです。大きな家でしたからご馳走が沢山出て、お酒もふんだんにありました。やがて祝いの宴も終わりに近づきましたので、甚兵衛さんはお礼をのべていとまを告げ家路につきました。

お土産をいっぱいもらって外に出ますと、ちょうど十五夜様なのでしょうか、空にはまん丸いお月様が出てまるで昼間のようです。甚兵衛さんは、鼻歌を歌いながら下町から中鶴の道を帰っていきますが、お酒をしたたか飲んでいるので、足下がふらつき千鳥足です。しかし、転んでなるものかと一歩、一歩踏みしめながら歩いていきます。

道の両側は、月明かりに映えて青々とした田んぼが、向こうの山すそまで広がっています。おまけに田んぼの中からは、蛙が「グワァ、グワァ……」と賑やかに囃したてて、気分は最高です。

ところが甚兵衛さんが、馬ん糞橋のところまで来たときのことです。蛙の鳴き声がはたと止んでしまいました。甚兵衛さんは「おや、おかしいな」とつぶやきながら、耳をすましますとしばらくして、また一斉に鳴きはじめました。甚兵衛さんはホッとして歩きかけましたが、蛙の声がどうもおかしいのです。どうも蛙たちは声を揃えて何か言っているようです。立ち止まり耳をすませてよく聞くと蛙たちは、

「コデク、コデク、コデク……」と、鳴きたてているのです。いささか酔っていた甚兵衛さんでしたが、あまりにも人を馬鹿にしたこの言葉にかんしゃく玉が破裂し思わず蛙どもに向かって、

「俺は　コデク　じゃねーぞー、立派な大工のとうりょ

うじゃぞー」

と、がなりたてました。その途端蛙どもは、一斉に鳴くのを止めましたが、しばらくすると又も

「コデク、コデク、コデク……」

の大合唱です。その声は前にもまして大きく聞こえてきます。甚兵衛さんは、いよいよ腹を立てて、いっそう大きな声を張り上げて、

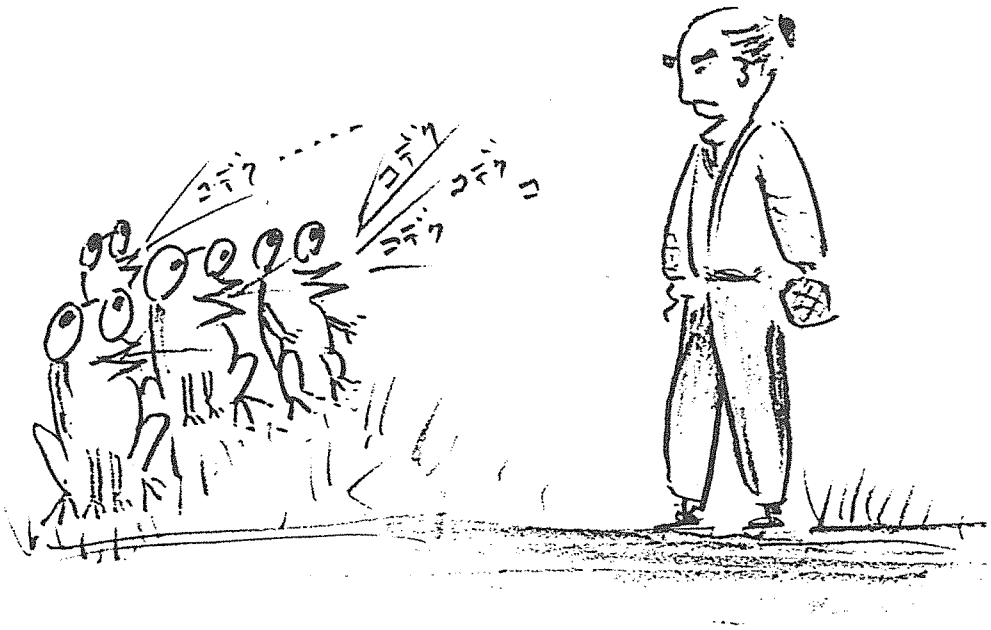
「馬鹿にするなー、コデク　じゃねぇぞー。わからんのか。今日出来た新築の家でもわかるじゃろが」

と、怒鳴り返しました。蛙たちの声はその大きさに驚いたのか、ハタと止みましたが、しばらくするとまたもや、

「コデク、コデク、コデク……」

と、耳をつんざくような大合唱です。甚兵衛さんが、何回繰り返しても同じことでその声は益々大きくなるばかりです。もういかなる甚兵衛さんでもいたたまれず、その場から一目散に逃げ出してしまいました。

やっとの思いで家にたどりつくと、手に持っていた土産を放り出し、父親にこのことを話しましたが、父親は息子に向かって静かに言いました。



「そりゃそうかも知れん。近頃のおまえは腕を磨くことより、自分の腕を自慢することばっかりじゃ、今のまん

まじゃ「こそくりデク」で、誰も相手にせんごつなるぞ」と、いいました。

甚兵衛さんは、蛙の声と父親の言葉ですっかり酔いもさめ、自分を恥じて心を入れかえる決心をしたのです。そして次の日からは、人が変わったように仕事に熱心になり、腕を磨くようになりました。その甲斐があって後には、近くの村や町には二人といない程の立派な腕を持った、大工のとうりょうになったということです。

※　田村さんが幼い頃、お父さんからよく聞かされた話で、田村さんも大変励みになったということです。

ブスくた

家床　永友　千秋

昔ある村にブスというおりこうな子どもがいました。兄さんの名はシュンでした。

お父さんが、

「ブス君よ、今日はなくなったおじいちゃんの命日(めいにち)じゃかり、お寺にいって和尚(おしょう)さんに夕方に来てくださいとたのんできてくれ、和尚さんは黒い衣をきて大きな緑色のざぶとんにすわっておりゃるかりね」

とたのみました。ブス君は、

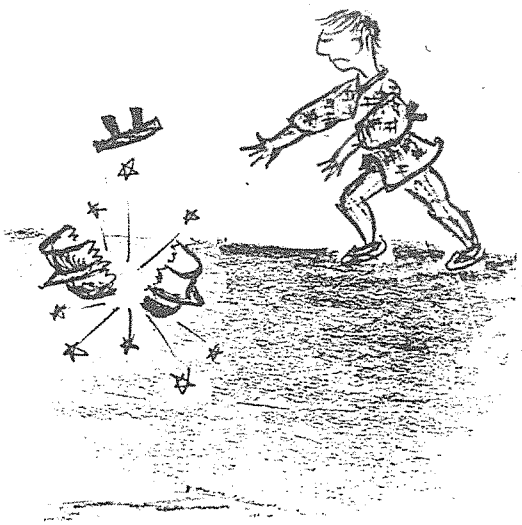
「はーい」といってすぐ出かけました。ずんずん行っていると、緑の草原があって、黒い着物をきてすわっているものがいます。ははあー、これが和尚さんにちがいないと思って

「和尚さん和尚さん、今日はなくなったおじいさんの命日じゃかり夕方来てください」

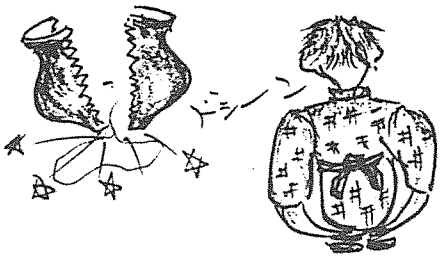
とたのみました。すると、

「モー……」

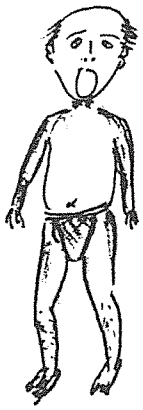
と返事をされ
ました。
「モー……
じゃない。夕
方じゃ」
と言いました
が、やっぱり
「モー……」
といわれるの
でブス君は腹
を立てて大声で
「夕方といったらゆうがたじゃ、夕方じゃよ」
と言って帰りました。お父さんはその話を聞いて、笑い
ながら自分でお寺に行きました。
お母さんは
「和尚さんに熱い御飯をごちそうしよう、ブス君は釜の
下をもやしてよ」
とたのみました。ブス君が、は釜の下をもやしていると、
は釜がにわかに「シュン、シュン、シュン」といいだし
ました。
「シュン兄さんは仕事に行っておらんど」
と言うと今度は、は釜のふたが
「ブスくた、ブスくた、ブスくた」
と言いだしました。これを聞いたブス君は、
「ぼくはくっちゃおらん、うそを言うな」
と腹を立てて釜をとって投げました。
「クワーン」
と言うとともには釜は割れて、御飯があたりにちらばり
ました。
「今になっ
てクワーン
と言っても
だめだ、ブ
スくた、ブ
スくたと何
べんも言っ
たじゃね
か」とかん



かんに腹を立てました。
お父さんが、和尚さんに甘酒を御馳走することにして、馬屋の二階から酒つぼをおろす加勢をブス君にたのみ、
「ブス君は尻をかかえていてくれ」
といって酒つぼをおろし始めました。



「しっかり尻をかかえているんだよ」
お父さんが酒つぼの手をはなすと、酒つぼは地面に落ちて割れてしまいましたが、ブス君は自分のお尻を力一ぱいかかえてきました。
夕方に和尚さんが見えました。
「お風呂にでも入ってゆっくりしてください」
と風呂に入ってもらったところ、お湯がぬるいので和尚さんはブス君に、
「そこへんにあるものを何でも燃やしてよ」
と頼んで、風呂から上がられたら衣がありません。いくらさがしても無いので、ブス君にたずねると、
「そのへんにあるものを何でも燃やしてよといやったかり、そこにあるものを燃やしたっじゃが」
とブス君は平気でした。おりこうなブス君、とんだ失敗ばかりでしたね。



ここにも「ちんじょきじょき」はいた

後小路　上野　誠三

小丸から旧小丸橋を渡って、坂本の入口から右に折れると、下持田に通ずる道があります。

昔は、左は椎の木の生い茂った突き出した山で、右は葦のぼうぼうと生えた河原でした。この突き出した所を御崎ケ鼻と呼んでいました。

ここを過ぎると、左は一面の田圃、道の右手は深い用水路が流れていて、山手の方からの小川が合流してせせらぎの音が聞こえていました。

人家もないのに、道端の草むらの中に小さな古い墓が二、三基見える何かわけありそうな寂しい所でした。

私も子供の頃、仲間といっしょによく蛍とりに行ったものです。ここの蛍は大きくて、大きな蛍がたくさん飛んでいました。

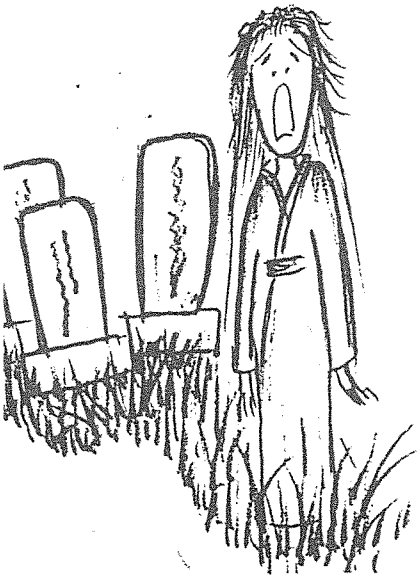
でも、せせらぎが聞こえると、「ここから先は怖いから行かん。帰ろうよ」と言う者が出て帰ったのを覚えています。

怖いというのには次のような言い伝えがありました。

墓の前を通ると、ちんじょきじょきと米をとぐ音が聞こえるかと思うと若い女の声で、「赤ん坊ー抱いて下さい」と呼びかけるそうです。かわいそうにと抱いてやり、気がつくと墓石を抱いていたというのです。

何人も墓石を抱かされたというので、暗くなると人通りも絶えていたとのことでした。

村の婆さまは、「女の人がお産がうまくいかず亡くなり葬られると浮かばれないよね。きっとこんな人の墓ではあるまいか」と話してくれました。



だご坂んたぬき

中尾　林　ツタエ

私が唐木戸に嫁いだのは昭和十二年十二月のことでした。その頃は、家の前も後も松山・杉山ばかり、だご坂を通って私の家の裏道が杉安に行く県道でした。今は家の前にきれいな県道が出来ています。

その頃、中尾に浅五郎さんといって、面白い物知りのおじいさんがおられ、父と仲が良くて「だご坂ん万平さん万平さん」と言ってよく遊びにこられました。私がどうして「だご坂」と呼ぶのだろうかと聞くと、

「そうじゃね、おっどんがまだ若え頃かり言いよっとよね。雨でん降りそになって暗めになっと、だご坂んうえん方かり、だごがごろごろ転げちきょったげな。ナベんフタも下がっちょったげなど。だごが転げちくっとに皆おおたげなかり誰いうともなしに「だご坂」という名がついたっじゃげな」

その頃は、自動車もなく材木を積んだ馬車が、だご坂を上がって行ったものでした。その馬車が坂を上がりホッとして休むたびに馬が糞を落としていく。それがたぬきさんの遊び道具で、通る人はその相手をさせられたのでしょう。

「今でん白い毛をしたたぬきがおるげなど、たぬきを見たもんが何人もおるかり、おごどんもだまされんごつせんにゃ」と、話してくれました。

或る夜のこと。夜中に、父の

「雨が降り出した。千切り巻きにいくど」

という声にびっくりして飛び起きました。まだ電気もない頃のことでカンテラに火をつけ、草履をやっと見つけて、庭に出たときは、父も主人も裸足で飛び出してそこら辺にいなく、私は一人で暗い中を裏の県道から杉山の

中にある細い道を走りました。その道の半分ばかりの所にきたときのことです。杉の木に当たりました。「あれっ」と思って右のほうに寄るとまたゴツン、前のほうへ行っても後ろへ行っても杉の木に当たる。暗くて何も見えない。もうこわくなって泣きべそをかいてしまいました。

その時、隣のおばさんの話を思い出しました。

『朝一番汽車に乗るためにだご坂ん土橋の所まで来ると、花嫁さんが川の方に頭を向けて寝ていた。びっくりしてだご坂を駆け上がって池田さんの家に飛び込んだ』

私はどうしようもなく冷たいものが背中を流れました。

また、浅五郎じんさんが

「たぬきがだますときは、小便かくっといいげな」

と、言っていたのを思いだしました。

私は、そこでいきなり足踏みしながら三・四回まわりながら

「人をだますと小便かくっど」

と、大声をあげました。すると、今まで何も見えなかったのに杉の剣先がボンヤリとがって見える。下を見ると細い踏み付け道がボンヤリ見える。ここだと思って県道まで引き返し、それから広い農道を一目散に走りました。

畑に着いたときは、六十枚ぐらい干していた千切りの簀(すのこ)がほとんど巻かれていました。その頃はビニールはなかったので巻き上げて棚に縛りつけ、むしろをかぶせて雨を防いだものでした。

三人で巻き終わると、また父

と主人は走り出しました。雨は一層激しく降ってきました。私は、置いていかれるとまたこわい杉山を一人で通らねばならないので、主人の袖をつかんで共に走りました。

帰ってから、杉山の話をすると

「ねぼけちょったっじゃろ」

と、笑われましたが、私にとっては冬の夜のこわいこわい話でした。

ソバ畑の川渡り

家床　永友　千秋

昔、染ヶ岡あたりは今のような立派な畑や道はなく、松山や竹やぶや雑木林の間の細い小道を行くと通山の村があって持田との間には家はなく、昼でもたぬきやきつ

ねをよく見かける所で、村の近くに少し畑があった。
ある秋の夕暮れ、神主だった勝之じいさんが通山の村祭りから帰っていると、向こうのソバ畑の中を一人の男が着物の尻を胸のあたりまで高々とからげて、「おお深けむんじゃ深けむんじゃ」とつぶやきながら渡っている。変な男じゃと見ているうちにおかしくなって、「おーいソバ畑の中で何しちょっとかえ」と近づいて行ったら、一匹の子ぎつねが逃げて行ったそうな。
「親類の祭りで一ぺごっそになち、帰りおったら急にあたりが暗うなち、川があるじゃねか、ちょっと渡ろうとしたら意外に深く尻をからげち渡りおった。こりゃソバ畑じゃが」
それにしても子ぎつね、うまくばかしたもの。

和助地蔵さん

大工小路　奥村ヤエ子

光音寺橋を渡って五十メートル位西の山へ入ると坂になっていて、そこに地蔵があります。それが和助地蔵さんです。
昔から、お嫁さんが嫁入りされるとその家に永くいてもらうために、嫁入りの晩に地蔵さんをお嫁さんに抱かせるというならわしがありました。私もお嫁にきたとき抱かされたものでした。
この地蔵さんについて、八十六歳の河辺チトエさんにお話をしてもらいました。
昔、この地区にそれはそれは情け深い巡査さんがおられ、村人ともよく親しみ、また村人にあやまち等があったときは、やさしく取りはからわれたそうです。
そんな優しい巡査さんでしたので、村のみんなが仲良く幸せな暮らしができるようにと、地蔵さんをまつられました。村人達はこのお地蔵さんをいつしか「和助地蔵」と呼ぶようになりました。巡査さんの名前が和助だった

からです。村人は「和助地蔵・和助地蔵」といってお参りするようになり、お陰でみんなむつまじい暮らしができました。

また、この地蔵さんは「イボ取り」としても有名になりました。

ある日のことです。お参りにきた人が手にイボができて困っていましたが、地蔵さんの頭をなぜながら「地蔵さんにもイボが多くてかわいそうですね」と言ったそうです。そうすると不思議なことに二・三日して、お参りしたこの人のイボがきれいに取れていたというのです。

これ以後「イボ取り地蔵」として評判になり、お参りが多くなったということです。

ところがこのお地蔵さんには面白いところがありました。ある人が「お地蔵さん、イボを取ってください」と言ったところ、翌日イボが増えていました。「イボを取ってください」でなくて、和助地蔵さんの気持ちをわかってあげる言葉によるイボ取りなんて、何とほほえましいお話ではないでしょうか。

第二部　伝説・昔ばなしの部

お殿様とひょうすんぼう

東平原　本田　親徳

俗にいう河童（かっぱ）のことを、日向では（特に高鍋では）「ひょうすんぼう」「ひょうすんぼ」といい、関西では「ガタロウ」といいます。

昔、高鍋藩の秋月家に、大変偉い殿様がおられました。あまり豊でない藩内の様子を心配されて、何かと人々の暮らしをよくしたいといつも考えておられましたが、それには農家の生産を高めなければならない。お米をうんと作ることだ。しかしお米を沢山とるには、肥料も大事だけど稲の成長には、何といってもかんじんの水がなければ駄目だと考えられ田んぼに水が少ないことを大変気遣っておられました。

その頃の農業は大変天候に左右されておりました。というのは用水として井戸水と天水（雨水）が中心でしたが、高鍋にはまだ用水路が一本もなかったのです。つまり、天の恵みである雨水が唯一のたよりでした。それで、何とかしなければといつも悩んでおられたのでした。

ところがある年の春、雨がショボショボ降る夜のことでした。今夜もあれこれと思案されながら、お堀ばたを歩いておられますと、向こうの堀わきの茂みからヒュルル…、ヒュルル…、と妙な鳴き声を立てながら黒い影が次からつぎへと飛ぶように出てきては、消えていくのです。お殿様は「はてな　何だろう」と不思議に思われました。

その頃、お堀ばたにはところどころこんもりした茂みがありました。それが、雨のショボショボ降る晩にかぎって、今夜のようなことが起こるので気に止めておられたのです。

お殿様は、御殿に帰られ床に着かれてからも今夜の出来事が、頭からはなれません。「何だろう？どうしたことだろう」などと、次々に頭の中に浮かんできます。しかしそのうちに昼間の疲れが出て、ウトウトと眠りに落ちて行かれました。

ところが、真夜中頃です。どこから入ってきたのか、